

「安倍晴明」の読み方

繁田 信一

些細ながらも面倒な問題

「生きててよかった」と心の底から思うに足る出来事が、これまでの私の人生には二つあった。その一つは、最良にして最愛の妻にめぐり逢えたこと。神奈川大学の大学院生として日本学術振興会の特別研究員に採用されていた頃に結婚して以来、私の一番の支えになってくれているのは、その妻に他ならない。そして、そうして既に幸福を掌中^{おんみょうじ}にしていた私に二つ目の大きな喜びを与えてくれたのが、『陰陽師と貴族社会』の刊行であった。

拙著『陰陽師と貴族社会』は、私が神奈川大学に博士論文として提出した「平安貴族社会の陰陽師」がほぼそのまま本になったものであるが、その論文を書いていた当時の私は、まさか無名の若造の論文があっさり出版されることになるなどは、夢にも思っていなかった。その頃の私には、自分の論文は指導教授の福田^{ふくだ}アジオ先生にさえ歓迎されていないように見えていたのである。

ところが、その論文によって「博士（歴史民俗資料学）」という学位を取得して間もなく、私は拍子抜けするほどの順調さで論文を出版する機会を与えられることになった。

道を拓いてくださったのは、福田先生だった。私の博士論文の審査にあたってくださった神奈川大学内外の5人の先生方の中で常に最も渋い顔をされていたのは、間違いなく福田先生だったのだが、その福田先生が私の研究を評価して下さっていたのである。

だから、『陰陽師と貴族社会』という本は、私にとっては、初めての著書である以上に、指導の厳しかった福田先生が実は私の研究を認めて下さっていたことの確かな証なのである。刷り上がった『陰陽師と貴族社会』をお渡しし

たとき、福田先生が満面に笑みを浮かべて喜んでくださったことは、きっと、私の一生の思い出となるだろう。

ただ、この嬉しい上梓も、ただ一つだけとはいえ、私に厄介な案件を抱えさせることになった。すなわち、あの安倍晴明の個人史を『陰陽師と貴族社会』の序章で大きく取り上げた私は、それまでうやむやにし続けていた「安倍晴明」という人名の読み方に関する問題について、そう遠からず明確な判断を示さなければならぬことを強く意識せざるを得なくなったのである。

ほとんどの現代人は、「安倍晴明」という人名を「あべのせいめい」と読むことに何の躊躇もないことだろう。その読み方は、目下、あまりにも当たり前なものになっているのである。だが、安倍晴明という平安時代の陰陽師は、ともに平安時代を生きた人々からも「あべのせいめい」などと呼ばれていたのだろうか。それが現実に平安時代に生きた一人の男性の名前であることを考えたとき、「あべのせいめい」というのは、いささか奇妙な名前であろう。

「安倍晴明」という人名の本来の読み方は、やはり、「あべのはるあき」といったあたりだったのではないだろうか。つまり、安倍晴明という平安時代の陰陽師については、その生前、「あべのはるあき」と呼ばれていたことが想定されるわけである。

そして、ここに喚起されたのは、実に些細ながらも本当に面倒な問題であった。

姑息な先送り策

「私が当初から一冊の本を出版する目的で原稿を書いたのは、今回が初めてのこととなります」というのは、私の二冊目の著書となる『平安貴族と陰陽師』の「あとがき」の一節だが、この所謂「一般書」として刊行された一冊の執筆は、私にとって、何とも楽しい経験であった。そのときに私が味わったのは、今にして思えば、初めて書きたいことを書きたいように書き得たことに由来する楽しさだったのかもしれない。

私の研究者としての立場は、かなり曖昧である。その場面に応じて「民俗学」

「日本史学」「宗教史学」などの看板を使い分けている私は、実のところ、それらの看板のいずれに対しても、特別な思い入れを持ってはいない。そして、「民俗学」「日本史学」「宗教史学」といった看板のいずれかを高々と掲げている研究者ならば、まず間違いなく、私を同業者と見做してはいないことだろう。

そんな私が研究者として最も大きな苦痛を感じるのは、何か特定の学問領域を意識して文章を書くことに他ならない。正直に言えば、東北大学で宗教史学を専攻する学生であった頃から、論文を書くうえでは「宗教史学」という看板に強いこだわりを持つ研究者たちの特殊で狭窄な思考や嗜好こそを最重要視しなければならないということに、私は心の底からうんざりしていた。もちろん、「博士（歴史民俗資料学）」という学位を持つ現在の私も、「民俗学」あるいは「日本史学」の看板を誇らしげに掲げる研究者たちの排他的で内向的な心性を第一に尊重した論文を書くことについては、かなり消極的である。

だから、特定の学会や学界の検閲を受けずに自己の研究成果を公表できるというのは、私にとって、本当にすがすがしいことであった。そう、私が『平安貴族と陰陽師』の執筆で味わった楽しさは、おそらく、そんなすがすがしさに裏打ちされた愉悦だったのだろう。

とはいえ、その『平安貴族と陰陽師』の出版には、「安倍晴明」という人名の読み方をめぐる問題が、『陰陽師と貴族社会』の刊行に対するよりもはるかにしつこくまとわり付いてきた。なぜなら、所謂「一般書」として企画された『平安貴族と陰陽師』では、全ての人名にルビを付さなければならなかったからである。

しかし、なかなか判断を下すことのできなかつた私は、姑息な方法を使って問題に向き合うことを回避した。つまり、ほとんど全ての人名にルビを付けながらも、「安倍晴明」という人名だけには一貫してルビを付さなかつたのである。そうして、「安倍晴明」についてだけは、その読み方を読者に一任したということになるのか。

絶妙にして適切な決断（？）

拙著『安倍晴明』がオカルト雑誌として知られる『ムー』の新刊紹介欄で取り上げられたことは、ここ数年の間に私を最も驚かせてくれた出来事の一つであるが、それにもかかわらず、この本の趣旨は、けっして安倍晴明の伝奇的な伝記を紹介することにはない。それどころか、私の『安倍晴明』は、その書名を裏切るように、専ら安倍晴明について論じた一冊でさえない。「安倍晴明」という主題の他に「陰陽師たちの平安時代」という副題をも持つ同書は、実のところ、平安時代の陰陽師たちを主人公とする本なのである。したがって、同書における安倍晴明の扱われ方は、あくまでも数多の「平安時代の陰陽師たち」の一人としてのそれでしかない。

その『安倍晴明』の概要は、安倍晴明を含む平安時代の幾人かの陰陽師たちの個人史を扱う「陰陽師はどう生きたか」と題する章である。まだ東北大学の学部学生だった頃から「いつか平安時代の陰陽師たちの個人史を書きたい」と思い続けていた私は、『安倍晴明』を書くにあたり、その十余年越しの願望の実現こそを最も主要な目的としたのであった。

おそらく、これむねのこれくに 惟宗 是邦・ふみたか 惟宗 文高・おおなかとみのさねみつ 大中 臣 実光・なかはらのつねもり 中原 恒盛などは、安倍晴明とともに平安時代中期に陰陽師として活躍した人々でありながら、日本史学や宗教史学の研究者の間でさえ、ほとんどその姓名さえ知られていないことだろう。だが、彼らもまた、間違いなく平安時代に陰陽師として生きた人々だったのである。したがって、彼らに注目するというのは、私にとって、あまりにも当然のことであった。

そして、このような意図から『安倍晴明』を書きはじめた私は、さすがに今度こそは「安倍晴明」という人名にルビを付けないわけにはいかなかった。惟宗是邦・惟宗文高・大中臣実光・中原恒盛のような地味な陰陽師たちを大きく取り上げるという異例の試みに手を染める以上、安倍晴明のような有名人については、その名前の読み方を確定するくらいのことをしなければ、あまりにもバランスが悪いというものだろう。

とはいえ、「安倍晴明」という文字列にはっきりと「あべのはるあき」とい

ウルビを付けるのは、やはり、勇気の要る作業だった。というのは、日本人が「安倍晴明」を「あべのせいめい」と読むようになったのは、昨日や今日からのことではなく、数百年は昔からのことだったからであり、また、今や、日本史学や宗教史学の学界においてさえ、「安倍晴明」を「あべのせいめい」と読むことが当然視されてしまっていたからである。

それでも、私は明確な決断を下した。すなわち、『安倍晴明』の出版にあたっては、地の文および平安時代中期当時の史料に見える「安倍晴明」という人名には「あべのはるあき」というルビを付ける一方、平安時代後期以降に成立した説話集などに見える「安倍晴明」という人名には「あべのせいめい」というルビを付けたのである。厚かましくも白面自賛するならば、これは、安倍晴明が生きた平安時代中期の事情と安倍晴明が伝説上の人物となった平安時代後期以降の事情とに配慮した、絶妙にして適切な判断であろう。

新たな問題の発生

こうして、『陰陽師』『呪いの都 平安京』を書くときには、「安倍晴明」の読み方に関する問題は、既に解決済みの過去のものとなっていた。『陰陽師』においても、『呪いの都 平安京』においても、「安倍晴明」という人名のルビに関しては、『安倍晴明』の先例が踏襲されればよかったからである。

しかし、『陰陽師』および『呪いの都 平安京』の執筆は、今度は「蘆屋道満」という人名の読み方で私を悩ませてくれることになった。蘆屋道満というのは、幾つかの伝承に安倍晴明あべの晴明の敵役として登場する悪辣な陰陽師であり、普通、その名前は「あしやどうまん」と読まれているのだが、『陰陽師』『呪いの都 平安京』を書くために道満についての考察を深めていた私は、不意に「蘆屋道満」という人名には「あしやのどうまん」と読まれるべき理由があることに気付いてしまったのである。しかも、その理由というのが絶対視できるほどに確かなものではなかったがゆえに、「蘆屋道満」の読み方をめぐる問題は、「安倍晴明」の読み方をめぐる問題よりはるかに性質が悪かった。

結局、『陰陽師』や『呪いの都 平安京』では、「蘆屋道満」という文字列に

「あしやどうまん」という一般的な読み方に従ったルビを付けたものの、これが本当に正しい措置だったか否かは、これからじっくりと考えていかなくてはならないだろう。

繁田信一著『陰陽師と貴族社会』

東京：吉川弘文館、2004年2月10日刊
341頁、9,000円＋税、ISBN 4-642-02398-4

繁田信一著『平安貴族と陰陽師——安倍晴明の歴史民俗学——』

東京：吉川弘文館、2005年6月1日刊
200頁、2,300円＋税、ISBN 4-642-07942-4

繁田信一著『陰陽師——安倍晴明と蘆屋道満——』

東京：中央公論新社（中公新書）、2006年4月25日刊
206頁、740円＋税、ISBN 4-12-101844-3

繁田信一著『安倍晴明——陰陽師たちの平安時代——』

東京：吉川弘文館（歴史文化ライブラリー）、2006年8月1日刊
200頁、1,700円＋税、ISBN 4-642-05615-7

繁田信一著『呪いの都 平安京——呪詛・呪術・陰陽師——』

東京：吉川弘文館、2006年9月1日刊
209頁、2,300円＋税、ISBN 4-642-07962-9